



2003年2月28日 第20号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会
広報委員会

第46回日本手の外科学会の 開催にあたって

第46回日本手の外科学会
会長 中村 蓼吾
(名古屋大学手の外科)

目 次

- 第46回日本手の外科学会の開催にあたって
- インド手の外科学会に参加して
- 2002年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドギャラリー(児島コレクション)
- 各種委員会報告
- お知らせ =学会案内=
- 編集後記

第46回日本手の外科学会学術集会を、名古屋大学手の外科がお世話させていただけることを大変光栄に存じ、先ずは会員諸兄姉に御礼申し上げます。

名古屋大学が整形外科学教室を含め、主催させていただきますのは、昭和53年の第21回(中川 正会長)、昭和63年の第31回(三浦隆行会長)に次いで3回目となります。今回は、「手の外科学講座」の主催となりますが、整形外科同門、教室の支援を得て、皆様方をお迎えする準備を進めております。

学術プログラムの詳細は、まもなくお手許に届く予定のプログラム・抄録集に譲るとして、この紙面をお借りして今回の名古屋学会の目玉と申しますか、特色について紹介させていただきたいと存じます。

1. **会期の変更**：昨年、新潟での総会の席上「開業の先生方が参加しやすい日程に」というご要望がございました。生田理事長はじめ、理事の諸先生方とご相談の結果、「今後の学術集会の日程を拘束するものではないが、試験的に変更してみてもどうか」というご意見をいただき、従来の木曜日・金曜日から、金曜日・土曜日に変更いたしました。これまでなかなかご参加いただけなかった開業の先生方には多数参加いただきますようお願い申し上げます。
2. **全員懇親会の開催**：上で述べました会期の変更をいたしました。従来から併催されてまいりました「末梢神経を語る会」につきましても、金曜日のままととなりました。しかし、全てのプログラムが終了してからとなりますと、大変遅い時間となってしまい、他のご予定との兼ね合いでご参加いただきづらいのではないかと考え、午後5時からの開催をお願いしました。一部のセッションと同時の開催となりますが、終了後は、これまでは開催されておられませんでした全員懇親会を企画いたしましたのでお楽しみいただければと存じます。他のセッションに参加されない先生はぜひ末梢神経を語る会にご参加のうえ、全員懇親会においでください。また、同門会の企画をされておられる教室もたくさんあるのではないかと思います。どうぞそれぞれのセッションでご発表、討論されました後は、全員懇親会で喉を潤わせてから名古屋の街にお出かけください。

全員懇親会：4月18日(金) 午後7時から、名古屋国際会議場イベントホール

3. **専門医制度について**：既にご承知のこととは存じますが、専門医制度については、この1年の間に大きな変化がありました。日本手の外科学会でも、専門医制度を求める声は従来から、評議員会などでございました。しかし最近の劇的な変化を受けまして、学術集会のパネルディスカッションとして取り上げることといたしました。当日は、専門医認定制協議会理事長の酒井 紀先生にもお越しいただけることとなっております。是非ともご参加いただき、この学会の将来を占う専門医制度についての活発なご討議をお願い申し上げます。
4. **最先端医学への挑戦**：今回の学術集会のテーマは、「21世紀 手の外科の挑戦と展望」とさせていただきます。そして、プログラムの編成にあたっては、「21世紀に何をすべきか、何が求められているか」を追及する会にできないかという視点で進めてまいりました。そして、再生医療を学術面だけでなく、社会面からもリードしておられる名古屋大学口腔外科の上田 実教授に「広がる再生医療の世界」と題してご講演をいただきます。また、シンポジウム「手の外科とAdvanced Technology」では、遺伝子解析、遠隔手術、胎内手術、ドラッグデリバリーシステムなど最先端の知見をご紹介いただくこととなっております。手の外科の将来への示唆をいただけるものと期待しております。
もちろん、その他のご講演、シンポジウム、パネルディスカッションなども、評議員の先生方を中心にご意見を頂戴しながら、企画を進めてまいりました。いずれも内容の濃いものとなったと自負いたしております。どうぞお楽しみにしてください。
5. **事前登録の導入**：特別な割引料金を設定することはできませんでしたが、当日の受付をスムーズに済ませるため、また予めクレジットカード等で支払ができるよう事前登録を行うこととしました。詳細は学会ホームページに掲載いたしました。どうぞご利用ください。

最後になりましたが、今回の学術集会ではいろいろな試みを行いました。また、試みようとは考えたのですが、断念せざるを得なかったものもございます。いずれも、「日本手の外科学会」、「手の外科学」の進歩・発展を目指し、皆様のお知恵を借りながら、悪戦苦闘した結果です。もとより、ご批判、ご叱責は覚悟のうえでございますが、どうぞ学術集会にご参加のうえ、忌憚のないご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

インド手の外科学会に参加して

山内裕雄

2002年11月22日から3日間行われたインド手の外科学会に参加しました。会長はムンバイ（旧ボンベイ）のDr. Taraporvalaで、会場はムンバイから200キロ東南、デカン高原の入り口にある学園都市プナ（Poona）にある病院の講堂でした。Local Chairmanはプナの若い形成外科医Dr. Jindalで極めて精力的に運営していました。

広大な国土に10億の人が住むインドにしてはまことにこぢんまりした学会で、参加者は200名弱、一会場、プログラムもコピー2枚という質素さ。でも討論は活発で、学会の原点のような感じでした。

実はこの学会には1976年にも招待され、その報告記を書いています（インド手の外科学会に出席して、整形外科28：348-350）。その学会はニューデリーで行われ、やはり大学の講堂でした。26年経っても規模はほとんど同じですが、演題数は増えたようです。そのころはマイクロサージャリーの勃興期で、指再接着の討論に会場は湧きましたが、ある老大家が「みなさんマイクロ・マイクロと騒いで

おられるが、そんなことに若い医師が血道をあげるのは問題だ。インドにはもっと重要な医療問題がある。産児制限・伝染病・栄養不良だ」とのたまわれ、討論がチョンとなったのに深い印象を抱きました。しかし、今回の演題をみると、各種flapなどマイクロの演題が多く、時の流れを感じました。

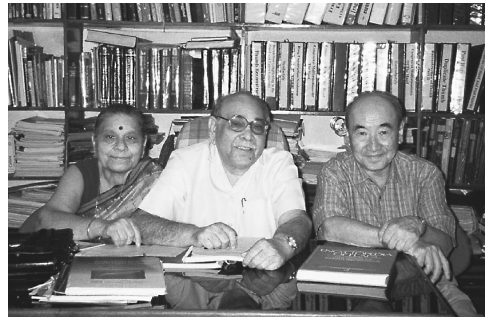
記念講演が2題あり、ひとつはチェンナイ（旧マドラス）のDr. Venkataswamiを記念したVenkataswami Orationで、オーストラリアのIan Taylorが"Giving a Hand"と題して、主としてマイクロを用いた指再建術の講演をしました。しかし彼はディスクのみ持参のcomputer presentationだったためか、なかなか画面が出ず、いったん休憩となってしまいました。このVenkataswami Orationは2000年8月14日に、同じ会場で開かれていた3rd Congress of APFSSHのPresidentであった玉井 進先生がおやりになったそうです。

もうひとつは一昨年IstanbulでのIFSSH CongressでPioneer of the Hand Surgeryとして表彰されたムンバイのDr. B. B. Joshiを記念するJoshi Orationで、小生が“Hand Surgery in Japan and my Personal Experience in Congenital Hand Conditions”という二題話をしました。マックのiBookを持ち込みましたので、そのPowerPoint presentationはスムーズに行き、幸いに好評を得ました。

公用語は英語、というよりあのインド英語です。彼らはヒンドゥ語やマラティ語などのインド語を話している。それが聞いているといつしか英語になっている。同じように聞こえる。インド英語というのはまさに彼らの固有語のアクセント・イントネーションそのままに話す英語であることを初めて認識しました。感心することはそれで堂々と討論する、まったく臆するところがない。われわれが日本人英語を恥ずかしいと思い、つい無口になるとの正反対です。その点では連中の爪の垢を煎じて飲むべきでしょう。日本人英語はけっして恥ずべきではない！

さて、この26年間にインドは変わったか？ 確かに街を走る自家用車は「外車」が多くなり、Honda・Suzuki・Hyundaiなど日本車・韓国車が幅を利かせ、たまにMercedes・BMWさえ見かけます。しかしタクシーはおんぼろインド車、それに加えてrikshaと呼んでいる小型三輪車がわんさと走っている。道路はまさに混然として、とてもインドでは運転できないなと感じます。ムンバイには巨大スラムがあり、それ以外にもいたるところに路上生活者がいる。感心することはそれでも犯罪は極めて少ないとのこと。これにはインド特有のカーストないし生まれつき所属職業集団を規定するジャーティ制度が関与しているようです。その生来の「刻印」から抜け出すことはできない。その範囲内で生活せざるを得ないし、そこにささやかな幸福を求めざるを得ない。ムンバイ・プナ往復の車中でJoshiのお嬢さんにいろいろ不躰な質問をしました。「この制度から抜け出せないか」「苗字と話し言葉でどのどういう階層かは分かってしまう。そこから抜け出せたにしても無所属階層になってしまいインドでは生きられない」と。為政者にとってはまことに都合のいい制度ではあります。医療保険制度はない。全人口の5%くらいがろうじて医療の対象となり、わずか2%くらいが潤沢な医療の恩恵にあずかれる。インド手の外科学会が小規模なのが理解できたようです。

インドには大金持ちがいる、IT産業が盛んである、核爆弾も保有している、これらは事実でしょう。しかし国民の大部分が貧困者であることもいまだ厳然とした現実です。インドの時の流れはガンジス川のようにゆったりしている。現在という断面に数千年の歴史が露呈している。インドは旅行者を一時的哲学者にする国です。「インドで考えたこと」にここしばらく取り憑かれています。

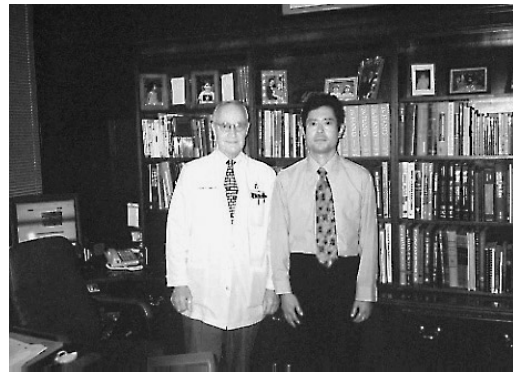


Joshi夫妻と彼のオフィスにて

2002年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow 報告記

京都府立医科大学整形外科
岡島 誠一郎

この度、2002年度日本手の外科学会JSSH-ASSH Traveling Fellowに選出され平成14年10月に第57回ASSHのAnnual Meetingを含めて米国中部の著名な手の外科の施設を訪問させていただきましたので報告いたします。特に今回のTraveling Fellowはニューヨークで起きた同時多発テロのために1年延期となり生田義和理事長、別府諸兄前国際委員会担当理事ならびに二見俊郎国際委員会担当理事には多大なるご尽力をいただき感謝しております。今回のASSHのAnnual MeetingはPhoenix, Arizonaで開催されました。その後、San AntonioのUniversity of TexasでDr. Green, Dr. Pedersonを、GalvestonのUniversity of Texas Medical BranchでDr. Viegas, Dr. Shahを、DallasのTexas Scottish Rite Hospital for ChildrenでDr. Ezakiを、LouisvilleのKleinert InstituteでDr. Tsai, Dr. Kleinert, Dr. Kutzを、IndianapolisのThe Indiana Hand CenterでDr. Fischer, Dr. Hastingを訪問いたしました。各訪問地で多大な歓迎を受け感激いたしました。字数の都合上、印象に残った点をいくつか報告したいと思います。今回、手術も多数見学でき非常に有意義でしたが、特にあのDr. GreenとDr. Kleinertの手術を間近で見学出来まさにhistoricalなひとときでありました。Dr. Ezakiも女性で日系ということもあり、非常に親切で僕自身が迷っている症例についてもいろいろアドバイスいただきました。また大変であったのはわれわれのlectureが早朝にあることが多く、前の晩は歓迎パーティーで翌朝6時過ぎからlectureをして、その後手術見学あるいは外来見学をしたあと、またまたパーティーというまさに殺人的スケジュールでした。特に今回はアメリカ大陸南北縦断旅行でしたので、たまの休みは移動日ということで体力的には大変きついものがありました。そんなときには行く先々での日本人留学生の先生方に大変お世話になり助かりました。今後もこのfellowは続いていくものと思いますが、行かれる先生方は体力を十分に蓄えられて行かれると良いかと思ます。



Dr Greenの自室での写真

弘前大学整形外科
西川 真史

米国多発テロで1年延期されたフェローシップに2002年10月に京都府立医大の岡島先生と2名で、約4週間にわたりASSHが開催された米国の南部のフェニックスから米国本土をのほぼ中央を北上する旅程で行ってまいりました。訪問先ではサンアントニオのDr. Green, Dr. Pederson, ガルベスタンのDr. Viegas, ダラスのDr. Ezaki, ルイビルルのDr. Kleinert, Dr. Tsai, インディアナポリスのDr. Fisher, Dr. Hasting, ロチェスターのDr. Bergerほかたくさんの高名な先生方に大歓迎を受けとても楽しい旅行でした。各施設では我々が持参した研究を講演する機会を与えていただき、オープンで和やかな雰囲気できつくりとディスカッションすることができ、とてもすばらしい経験をする事が出来ました。また、各地での諸先生方の精力的な研究や診療の実際、すばらしい技術での特色のある手術、巨大な施設を詳細に紹介していただき大変感銘を受けました。プライベートな時間には各地の名所の観

光案内をしていただき、さらに有名レストランやご自宅の食事に招待していただき想像を絶するアメリカのドクターのリッチな生活の一端を見せていただくことが出来ました。おかげさまでたくさんの友人ができこれからの国際学会でお世話になった先生方に出会う楽しみが出来ました。

生田理事長をはじめ国際委員の先生方そして日本手の外科学会の皆様、このような素晴らしい機会を与えていただきありがとうございます。この経験を今後の学会の発展に大いに生かしたいと考えております。

最後に、各地で日本のレジデントやリサーチフェローの先生方にも歓迎していただき感謝いたします。彼らはみなとてもがんばっていたことも報告させていただきます。



中央写真Dr.Kleinertと著者、左上より時計回りに:Dr.Pederson夫妻(左)・Dr.Green・著者・岡島先生, Dr.Green, Dr.Viegas, Dr. Tsai, 左よりDr.Amadio・著者・Dr.Spina・Dr.Berger, Dr.Cooney, Dr.Hasting, Dr.Fisher(中央), Dr.Ezaki(左)

ハンドギャラリー (児島コレクション)

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児島 忠雄

手の外科に最も関心を持つようになった私は、1973年のある日、横浜のホテルの売店で小さなメタルの手がついたキーホルダーを見つけました。その日以来、手の形のものに興味を持ち、折に触れて蒐集してきました。そして、いつの間にか、本棚から本が駆逐され、手がいっぱい詰め込まれていました。

大学を定年で退任し、埼玉成恵会病院に設立していただいた埼玉手の外科研究所に勤務することになりました。病院新館の完成に際して、私の手のコレクションを展示する場所を入院患者お見舞いのための玄関ロビーに創っていただきました。今まで、患者さんをはじめ多くの方に見ていただいております。感想を書いていただくノートブックも2冊目となりました。これには多くの方の手についての貴重な思い、考えが記されています。

この展示を多くの方にご覧いただき、手の持つ意味、手の重要性、アートとしての手、手の外科の必要性などについて考えていただきたいと思います。

コレクションは、次のような順序に沿って展示されています。



- 1) 手の持つ意味
- 2) 仏像の手
- 3) キリスト教の手
- 4) 祈りの手
- 5) 生活の中の手
- 6) 芸術作品としての手
- 7) 手形
- 8) 手のおもちゃ
- 9) 国際手の外科学会・日本手の外科学会記念品

次回より、この順序に沿って、いくつかの作品をお目にかけてと思います。

各種委員会報告

教育研修委員会

委員長 牧 裕

平成14年9月7日・8日に大阪医科大学臨床第1講堂において、阿部宗昭会長のもと第8回秋期教育研修会が開催され、大変盛会でした。参加希望者が多く、会場の定員の都合でお断りせざるを得なかった方もあったとのことでした。

平成15年度の第9回秋期教育研修会は学会の自主運営として、9月6日(土)と7日(日)に、東京の大手町サンケイプラザでエーザイ(株)との共催で行なわれます。定員は200名を予定しています。今回は東京での開催となりますが、今後は交通の便の良い主要都市を巡回する予定です。またこの研修会を学会で自主運営するにあたり、毎年の講演内容にばらつきが出ないように、単元ごとに講義内容の指針を委員会として作成しました。これを予め講師の先生方にお送りして、講義内容を考える際の参考にしてもらうことにしました。

現在日手会でも専門医制度についての議論がかわされていますが、もし学会独自で専門医制度を立ち上げるのであれば、研修委員会としても手の外科専門医としてどの程度までの知識と、技術の習得、臨床経験が必要か、そのトレーニングはどのように行うべきか、といった内容の検討が今後必要になると思われます。さらに今やっているような手の外科初級コースの秋期研修会の他に、専門医の養成を意識したより高度な内容の研修会が必要になるかもしれません。

この4月で加藤博之委員と私が任期満了となり、新委員も加わります。4月名古屋での学会時の春期教育研修会と自主運営になる秋期教育研修会を中心に活動してまいります。今後とも皆様のご支援を宜しくお願いいたします。

編集委員会

委員長 鈴木正孝

編集委員会としては第45回手の外科学会開催時に1回委員会を開催しました。その際に日本手の外科学会雑誌を年6回発行し、第1号を抄録号とすることが決定されました。これは手の外科学会発表演題が、必ずしも全例手の外科学会誌に論文として掲載されていないため、学会誌に掲載されなかった学会発表演題の検索ができなかったという不都合を補う目的です。

今後は手の外科学会雑誌第1号を検索すれば、手の外科学会発表論文全例の抄録を検索することができます。本年度は論文投稿も査読も順調でもなく第6号が発行されます。

論文投稿された先生方ならびに査読にあられた評議員の先生方に感謝いたします。

機能評価委員会

委員長 仲尾保志

機能評価委員会は、長野 昭担当理事、藤 哲アドバイザーのもと5人の委員で構成され、①日本語版DASHの完成と②手の外科機能評価表の改訂を活動方針として取り組んできましたが、このたび新たに藤田保健衛生大学公衆衛生学教室の今枝敏彦先生が委員として加わることになりました。

DASH (Disabilities of the Arm, Shoulder and Hand) は、ご存知の先生も多いと思いますが、アメリカ整形外科学会の評議会がカナダ・オンタリオ州のInstitute of Work and Healthと共同して作成した、上肢の機能障害を評価するためのスコアリングシステムです。欧米の論文では、しばしば共通の評価基準として使われていることから、委員会で日本語版を作成することになり、すでに翻訳作業はほぼ完了するに至っております。しかしながら、米国サイドの認可に際して、翻訳文の検証に関する様々な統計処理や患者への試行を要求されましたので、今後はこれらの課題を検討して行く予定です。このたび、藤田保健衛生大学の公衆衛生学教室小野教授にご協力いただくことになり、今枝先生には委員として参画していただく事になりましたので、順調に作業を進め、早期の日本語版発行に向けて努力して行きたいと思っています。

なお、日本語版の試案はすでに完成していますが、これを用いた学会発表、論文の作成につきましては、委員会としては認可できませんのでご了解ください。

次に、手の外科機能評価表の改訂作業ですが、①腱損傷の機能評価(担当：西田 淳委員)、末梢神経損傷の機能評価(担当：平田 仁委員)、③再接着手・指および複合損傷手の機能評価(担当：斎藤 覚委員)、④手関節障害の機能評価(担当：伊地知正光委員)の4項目について検討を行っています。評価表を作製するにあたっては、まず評価基準を確立することが必要という認識から、末梢神経麻痺は手根管症候群、腱損傷は屈筋腱断裂、手関節障害は橈骨遠位端骨折、再接着手・指については指の再接着に焦点を絞って、実用的な評価基準を作るべく作業を進めています。

用語委員会

委員長 浜田良機

日本手の外科学会用語委員会は、昨年、用語集発行を終えて、現在は次のステップに向けての英気を養っているところであります。用語集は会員の先生方に少しでもお役にたてるようなものを作成することが最も重要なことではありますが、同時にそれをできるだけ安く会員の元へ届けるという役目もあります。この1年は、英気を養うと同時に、安く会員に届けるという事で出版社との間に存在する商業的あるいは経済的な問題を解決する努力を行ってきました。今回の用語集の価格については、多少ご不満に思う先生方もあるかと存じますが、次に改訂される用語集では、内容は一層充実しかつ経済的にもご満足がいただけるものをお手元に届けることができるのではないかと考えています。用語委員会としては、手の外科学用語集改訂第2版はかなりの自信をもって送り出したものであります。時間的制約もあって、われわれが気付かなかった不備もあるかと存じます。会員よりの用語集の内容、その他についての忌憚のないご意見をいただいて今後のよりよい用語集作成の資料にしたいと考えております。是非ともご意見を願います。ご意見のあて先は、事務局あるいは委員長で結構です。ご意見をお待ちしております。

広報委員会

委員長 田中寿一

本年度の広報委員会の活動をご報告いたします。

事業は例年通りの日手会ニュースの編集・発行と手の外科パンフレット、インターネットのホームページの充実と学会グッズの作成でした。

今年度より伊藤恵康担当理事のもと、委員は小生と青木光広先生、田中英城先生、谷口泰徳先生、島田幸造先生、鈴木康先生で構成され、本年度も年に2回の委員会を開催しました。

- 1) 日手会ニュースは、平成14年9月30日に第19号を発行し、本20号を発行しました。(同時にインターネットホームページへも掲載)興味ある企画などあれば、是非お伝えください。(担当鈴木委員)
- 2) 手の外科パンフレットは、⑯キーンバック病(谷口委員)と⑰デュブイトレン拘縮(島田委員)を完成、新たに⑱野球肘(鈴木委員)、⑲術後の注意点、ケアの2項目が作成校正中です。さらにと⑳上腕骨顆上骨折、㉑RA手の作成を立案中です。会員の諸先生方の、さらなる有効活用と新たな希望項目があればお知らせください(谷口委員)。
- 3) インターネットホームページ
インターネットの普及により広報活動の中心に成りつつあり、本委員会が、充実にむけ最も力を入れている活動です。現在、事務局との連携により、可能な限り、速やかに改訂版をアップロードできるように努力中です。しかし、全会員のインターネット化とsecurityの確立などの問題はそのままです。Securityに対するこれからの方向としては、まず全評議員のID、Passwordを取得し、運用を始め、これをたたき台にして、その後に、全会員に広げていく方式が検討されています。これにより会員間の連絡や情報交換(症例検討など)が容易になると思われます。また一般市民への対応はその後になる予定で、しばらくはこちらからの一方通行のままということになります。会員の先生方の積極的なご意見、参加をお願いいたします。(島田委員・田中(英)委員)
- 4) 学会グッズの選定：新潟の手の外科学会にて発売した第1号グズーネクタイは大好評です。在庫に限りがございますので、お早めにお申し込みください。また第2号としてピンバッジ(含むネクタイピン)は、故藤巻先生の図案にて作成発注中です。4月の学会(名古屋)にて発売予定です。会員自身の購入も含め、活用をお願いするものです。(田中(寿)、青木委員)
- 5) 日本医学会総会の展示

理事長の命を受け、今年4月福岡で開催される第26回医学会総会(すこやかメッセ2003)に公開展示を行うべく準備中です。総会に参加される会員の先生は是非お立ち寄りください。

以上、本年度の活動をご報告いたしました。本委員会はさらなるホームページの充実、新パンフレット作成、グッズの拡充など、伊藤新理事の舵取りのもと精力的に活動を行うことができました。次年度も“手の外科”への理解を深める活動を委員全員一致協力して行ってゆく所存ですので、会員の先生方の叱咤、激励をお願いいたします。

社会保険等委員会

委員長 立花新太郎

1. 平成14年4月診療報酬改定への対応

WHOが世界で最も優れた医療サービス体制と認めた日本の国民皆保険制度も、人口高齢化と共に増大する医療費の前に風前の灯のようです。平成14年度は厳しい国家財政状況の中で保険制度発

足以来、初の医療費マイナス改定が行われました。

各学会の社会保険担当の委員会是对应に忙殺されました。当委員会でも評議員アンケートを集計し、外保連を通じて改定要望を提出しました。

2. 外保連委員会活動について

通常業務としては、各委員会で試案の改訂作業が行われました。平成14年度（4月以降）は、実務、手術を佐々木、立花、処置、検査を清水、各委員が担当して出席いたしました。

過日、11月25日に外保連総会が開かれ各委員会の試案 手術;第5版、処置;第2版、今年度は、4月の診療報酬改定について手術の施設基準について抗議が相次ぎ、外保連としてはこれを諒承したわけではなく、頭越しに決定された経緯について何回かにわたり釈明がなされました。さらに、各学会での手術件数アンケート等を取りまとめ外保連は、原則として、施設基準撤廃の意思表示をしました。

3. 診療報酬改定について

平成14年4月改定では

1. 腱 滑膜切除術（新設）
2. 創外固定の適応拡大（改定）
3. 同一手術野の手術適応拡大（改定）の、3つの要望が実現いたしました。

平成15年4月の改定にむけては

新設 1. 神経移行術

2. 内反手手術

改定 1. 舟状骨偽関節

2. 早期リハ

3. 複数手術に係わる経費の特例（前腕を含むよう要望）の、3点が上がっています。

平成16年4月改定に向けては評議員アンケートを実施したところです。

4. ランチョンレクチャー「手の外科 おける保険診療について」

新潟で開催された第45回日手会学術集会時に、恒例となりました中村純次先生のランチョンレクチャー「手の外科における保険診療」がおこなわれました。今回も大好評で、会場に入れない会員がでたようです。現在、名古屋での第46回学術集会での講演についてご準備いただいているところです。

5. 包括医療制度について

Diagnosis Procedure Combinationの手の外科関係については佐々木委員、露口委員が、作成に関わっています。α版は9月に交付され、改訂版β版は中医協の承認を得て平成15年4月より特定機能病院に適用される見込みです。やがては、一般病院にも拡大される日がくると予想され対応を準備する予定です。

先天異常委員会

委員長 川 端 秀 彦

従来より行っている先天異常委員会の活動の中で“手の先天異常の分類”については一応の結論を出しました。現在は、手の先天異常症例の登録を継続し、日本手の外科学会が提唱する“手の先天異常の分類”に基づいて症例の整理を行い、この分類法が診断・治療に有用であることを実証しようとしています。分類に関連して“先天異常で用いられる用語の統一”を行い、日本手の外科学会用語集

との整合性を高めるようにしました。

現在、主な疾患の評価基準の作成に着手しています。その手始めに行った母指多指症の評価基準の作成では先天異常委員会の委員だけでなく、より広く手の先天異常を見る機会の多い先生をこちらで選ばせていただいて、協力を仰ぎました。その甲斐があって短期間に100例を越える詳細なデータを収集することができ、これらを分析することによって、今年中には“母指多指症治療評価基準”とも言えるものが完成できる見込みです。

例年、日本手の外科学会総会の会期中に開催される“手の先天異常懇話会”の準備も先天異常委員会の大切な定期業務です。全国の施設から持ち寄っていただいた、診断や治療に難渋している症例を多数の専門医の間で検討し、検討結果を持ち帰って日常業務に役立ててもらうことがひとつの目的です。さらに日頃この種の疾患を目にする機会が少ない先生方の勉強にもなるような会を目指しています。そのために検討しました症例につきまして、日本手の外科学会雑誌に検討の要旨を掲載しております。昨年度より始めました試みですが、ごらんになった先生方もおられるかと存じます。

是非、懇話会当日はたくさんのご参加をお願いいたします。詳しくは日手会のホームページやこの日手会ニュースにお知らせを載せておりますのでご参照ください。

これらと平行して先天異常手についての教育研修のあり方の検討、先天異常相談システムの設置も前向きに進めていく予定です。私たちは活動を通して先天異常手を有する患者さんが等しく高い水準の治療を受けられるような社会を作っていきたいと考えています。諸先生方のご支援・ご指導を宜しくお願い申し上げます。

国際委員会

委員長 南川義隆

国際委員会では12月にTraveling Fellow とCorresponding Memberの選考を行いました。香港手の外科学会へ約10日出席していただく香港-日本手の外科交換留学(HKSSH-JSSH Exchange Ambassadorship)は40歳までの1人、American Society for Surgery of the Handの出席とアメリカの施設を約1ヶ月訪問するASSH Traveling Fellow は45歳までの2人で、いずれも日手会会員が評議員の推薦を受けて応募します。今年度はそれぞれ3人と7人の応募者がありました。現地での講演と交流を目的とするため、海外発表、英語論文、海外留学経験および日手会の活動などと年齢を考慮し選考しています。渡航費と滞在費は日本手の外科学会で援助されます。

今年の日本手の外科学会総会では、平成14年度のHKSSH-JSSH Exchange Ambassadorship中村俊康先生、アメリカ同時テロの影響で1年遅れの平成13年度のASSH Traveling Fellow の西川真史、岡島誠一郎両先生の報告の後、平成15年度のTraveling fellowの選考結果を発表します。Hong KongからのExchange FellowのDr. CH Wong、アメリカからはBunnel traveling fellow としてDr. W. P. Andrew Leeが総会において講演されます。総会の前後には、国内の施設を数ヶ所訪問していただく予定で現在日程調整中です。総会などで見かけられたときにはお気軽に声をかけてお迎えください。Corresponding memberはスペインのMarc Garcia-EliasとアメリカのRichard Berger、韓国のPoong-Taek Kim の3名の先生が選出され評議員会での承認後決定します。3人も著名な先生なのでご存知と思いますが詳細は次回紹介することとします。

今年度は5th-APFSSH (11/26~11/29)の開催年になりましたが、来年度(2004年)は国際手の外科IFSSHがプラハに於いて、第4回日米手の外科合同会議もASSH主催で2005年春にハワイで開催予定との連絡がありました。今年の5th-APFSSHで同時開催が決定したThe 1st Meeting of the Japanese-

Italian Hand clubも来年のIFSSHの前後の期間を利用してイタリアで第2回の開催が計画されています。また、インドネシアからの研究員の受け入れ依頼と韓国手の外科学会からの日本手の外科学会との交流に関する提案があり現在検討中です。日手会も国際色がさらに強くなるよう国際委員会が努力したいと思います。ご意見、要望等ございましたら日手会本部までお願いいたします。

Journal "Hand Surgery" のAsian Volume (JSH-Asia) はJSH-AmがASSHのJSH-Br. がESSH (European Society Surgery of the Hand) のOfficial Journalであるように、APFSSHのOfficial Journalとして発刊され、現在は生田理事長がEditor in Chiefとなっています。日手会会員の先生方が積極的に投稿され、高い国際的評価を受けることを期待いたします。なお、投稿規程その他の情報はURL : <http://www.worldscinet.com/hs/hs.shtml>をご参考にしてください。

第5回アジア太平洋手の外科学会(5th Asian Pacific Federation Society for Surgery of the Hand)の準備状況

準備委員会委員長 別府 諸 兄

会期は11月26日(水)から29日(土)まで大阪国際交流センターで開催します。2nd announcementの発送も終了していますが、会員の先生方にはホームページ (<http://jssh.gr.jp/5apfssh/>) を通じてご覧いただけます。初日のWelcome partyは大阪国際交流センターで海外からの先生方と楽しく顔合わせしていただき、2日目は、Japan Nightとして日本庭園のきれいな太閤園別館で日本の伝統芸能を中心としたパーティーを準備中です。3日目のPresidential Banquet以外は昼食・夕食も参加費に含まれています。国内の先生方に大勢参加いただけるように参加費は¥30,000(早期割引登録)と国内で開催される国際学会では破格の低価格を設定いたしました。

ソーシャルプログラム委員会では、さらに学会期間中の観光ツアーやUniversal Studio Japan訪問など同伴者の活動も企画しています。プログラム委員会では招待講演、シンポジウム、教育講演、一般演題とポスター演題のほかにワークショップやランチョンセミナー、モーニングセミナーなど実に盛りだくさんの内容で準備を進めています。

学会期間中には、近畿地方の大学の先生方を中心に、ローカルホスト委員会を結成し協力いただきます。フェンドレイジング委員会では現在資金集めに奔走しています。5th APFSSHに合わせて、The 1st Meeting of the Japanese-Italian Hand Club(会長：藤 哲教授)が28日(金)に開催され、イタリアからはすでに10数名の演題が提出されています。The 1st Congress of APFSHT (Asian Pacific Federation of Societies for Hand Therapists) は27日(木)に予定されています。会員の先生方から多数のHand therapistに参加を呼びかけてください。

(詳細はホームページからのリンクかstubota@sapmed.ac.jpまで)

Kleinert SocietyとMAYO Hand Club RE-UNIONが計画されていますが、この機会に他の集会を計画される場合は日手会事務局まで連絡いただければホームページに掲載いたします。

4月の日手会総会の頃にはもう少しプログラムの内容も充実してきますが、順次ホームページで最新情報を掲載します。一般演題応募(4月30日まで)、早期割引登録(7月31日まで)も全てインターネット上で行います。参加国の増加を考慮しますと、20~30数年に一度しかまわってこない国際学会であり、APFSSH参加国の中でも圧倒的に会員数の多い日本での開催ですから、たくさんの先生方にご参加いただき成功させたいものです。

会員の皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

.....お知らせ.....

手の外科研修施設一覧

研修内容などの詳細は日手会ホームページをご覧ください。

研修希望者は各研修施設に直接、申請、交渉を行ってください。教育研修委員会および日本手の外科学会は研修医の申請、および研修に関しては一切、関与いたしません。

施設番号	施設名	研修責任者	住所	TEL
1	北海道大学医学部附属病院整形外科	三浪明男	060-8638 札幌市北区北15条西7丁目	011-716-1161
2	大阪労災病院	政田和洋	591-8025 堺市長曽根町1179-3	072-252-3561
3	山口県厚生連小郡第一総合病院	土井一輝	754-0002 山口県吉敷郡小郡町下郷 862-3	083-972-0333
4	新潟手の外科研究所	吉津孝衛	950-0965 新潟市新光町1-18	025-283-0306
5	済生会山形済生病院	清重佳郎	990-8545 山形市沖町79-1	0236-41-0849
6	東京手の外科/スポーツ医学研究所	山口利仁	192-0002 八王子市高月町360	0426-92-1115
7	埼玉手の外科研究所	児島忠雄	355-0072 東松山市石橋1721	0493-23-1221
8	聖隷浜松病院 手の外科・マイクロサージャリーセンター	斎藤英彦	430-8558 浜松市住吉 2-12-12	053-474-2222
9	鈴鹿回生総合病院	藤澤幸三	513-0836 鈴鹿市国府町112-1	0593-75-1212
10	医療法人あかね会 広島手の外科・微小外科研究所	津下健哉	730-0811 広島市中区中島町9-5 三津石ビル3階・4階	082-544-1227
11	大阪厚生年金病院	正富 隆	553-0003 大阪市福島区福島4-2-78	06-6441-5451
12	名古屋掖済会病院整形外科	渡邊健太郎	454-0854 名古屋市中川区松年町4-66	052-652-7711
13	弘前大学医学部附属病院整形外科	藤 哲	036-8562 弘前市在府町5	0172-33-5111
14	広島大学整形外科	越智光夫 石田 治	734-8551 広島市南区霞1-2-3	082-257-5232
15	Nara Combined Program in Surgery of the Hand(奈良マイクロサージャリー・手の外科研究所, 奈良県立医科大学整形外科)	玉井 進	631-0024 奈良市百楽園5-2-6 (西奈良中央病院)	0742-43-3333
16	新潟県立瀬波病院リウマチセンター	石川 肇	958-8555 村上市瀬波温泉2-4-15	0254-53-3154

日本手の外科学会第9回秋期教育研修会

会 期：平成15年9月6日(土)，7日(日)

会 場：大手町サンケイプラザ 地下鉄大手町駅に直結（E1出口）
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-7-2 TEL 03-3273-2257

企 画：日本手の外科学会教育研修委員会
※日本整形外科学会，日本形成外科学会の教育研修講演単位として申請の予定です。

共 催：エーザイ株式会社

受 講 料：20,000円（テキスト代，日整会教育研修会受講料，懇親会費を含む）

申込方法：往復はがきに氏名・連絡先住所・連絡先電話番号/ファックス番号・勤務先・卒業年度をご記入の上，下記申込先あてお申し込みください。
申込締切：7月末日 ※先着200名とさせていただきます。

申 込 先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013
日本手の外科学会事務局「日手会第9回研修会事務局」宛
TEL 052-836-3511/FAX 052-836-3510

プログラム(予定)

9月6日(土) 第1日め

14:00～15:00	手の外科診察に必要な機能解剖	藤 哲 (弘前大学)
15:10～16:10	手の外科治療の基本	田 崎 憲 一 (荻窪病院)
16:20～17:20	外傷性手関節障害の診断と治療	別 府 諸 兄 (聖マリアンナ医科大学)
18:45～	懇親会	

9月7日(日) 第2日め

9:00～10:00	腱損傷の治療(伸筋腱を含む)	堀 内 行 雄 (川崎市立川崎病院)
10:10～11:10	末梢神経損傷の診断と治療	落 合 直 之 (筑波大学)
11:30～12:30	手の外傷性拘縮の診断と治療(ランチョンセミナー)	薄 井 正 道 (東北北海道病院)
12:50～13:50	手の感染症の診断と治療	根 本 孝 一 (防衛医科大学校)
14:00～15:00	損傷手の修復に必要なマイクロサージャリー	黒 島 永 嗣 (帝京大学)
15:10～16:10	上肢腫瘍の診断と治療	伊 原 公 一 郎 (山口大学)
16:20～	閉会式	

日本手の外科学会 教育研修ビデオライブラリー

2003年度最新版のビデオライブラリーが出来上がりました。第46回日本手の外科学会会期中にポスター会場、事務局受付で閲覧できます。

希望される会員には実費（1本3,000円）で頒布いたしますので、事務局受付でお申し込みください。

巻数	タイトル	講師
1	腱移行術	津下 健哉
2	手の外科医に必要な皮弁の挙上法	土田 芳彦 他
3	橈骨遠位端骨折に対する種々の手術的治療法	斎藤 英彦 他
4	鏡視下手根管開放術	奥津 一郎 他
5	手関節鏡	玉井 和夫 他
6	Dupuytren 拘縮の手術 有茎血管柄付きDIP関節を利用した指PIP関節再建のコツ	福居 顕宏 黒島 永嗣
7	Herbert Screwによる舟状骨偽関節手術	井上 五郎
8	腕神経叢損傷全型麻痺の再建手術： Double Free Muscle Transfer法(新版)	土井 一輝
9	リウマチ手関節の手術	政田 和洋
10	母指再建術①②	川端 秀彦 他
11	母指再建術③④	稲田 有史 他
12	遊離筋膜脂肪弁移植を用いた先天性近位橈尺骨癒合症の授動術	金谷 文則
13	手の外科手術手技 (1)	津下 健哉 木森 研治
14	手の外科手術手技 (2)	津下 健哉 木森 研治
15	手の外科手術手技 (3)	津下 健哉 木森 研治
16	手の外科手術手技 (4)	津下 健哉 木森 研治

2003年度最新版

17	手の外科手術手技 (5)	津下 健哉 木森 研治
18	手の外科手術手技 (6)	津下 健哉 木森 研治
19	手の外科手術手技 (7)	津下 健哉 木森 研治
20	指尖切断の被覆法	土井 一輝 他

バッジが完成しました!

昨年、第1段として作成しましたネクタイはスーツとの相性もよく、大好評です。完売まであとわずか。ご希望の方はお早めにお申し込みください。本年度は第2段として間もなくバッジも完成します。デザインは故藤巻悦夫先生が第42回日手会の際、記念品として作成されたものをメモリアルとして復刻させました。いずれも第46回日手会会期中、事務局デスクで販売いたします。冷やかに是非事務局デスクにお立ち寄りください。ただし、数に限りがございます。売り切れご容赦ください。

ネクタイ
1本3,000円
バッジ(完成予定)
1個800円(予定)

第5回リウマチ手の外科研究会

会 期：平成15年 5月23日(金)
 会 場：金沢市/金沢ニューグランドホテル
 詳細は <http://www.ra-hand.com>

第14回日本末梢神経学会

会 期：平成15年 8月30(土)
 会 場：東京都/東京慈恵会医科大学講堂
 会 長：井上 聖啓（東京慈恵会医科大学神経内科）
 問合せ先：〒105-8471 東京都港区西新橋3-19-18 東京慈恵会医科大学神経内科内
 TEL 03-3433-1111

第12回日本形成外科学会基礎学術集会

会 期：平成15年10月 9日(木)～10日(金)
 会 場：東京都/京王プラザホテル
 会 長：中島 龍夫（慶應義塾大学形成外科）
 問合せ先：〒160-8582 東京都新宿区信濃町35 慶應義塾大学形成外科内
 TEL 03-3353-1211

第30回日本マイクロサージャリー学会

会 期：平成15年11月13日(木)～14日(金)
 会 場：岡山市/岡山コンベンションセンター
 会 長：光嶋 勲（岡山大学形成外科）
 問合せ先：〒700-8558 岡山市鹿田町2-5-1 岡山大学形成外科内
 TEL 086-223-7151

5th Congress of APFSSH

会 期：平成15年11月26日(水)～29日(土)
 会 場：大阪市/大阪国際交流センター
 会 長：生田 義和（広島鉄道病院）
 演題締切：平成15年4月30日予定
 問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有)ヒズ・ブレイン内
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510
 E-mail : apfssh@jssh.gr.jp
 詳細は<http://jssh.gr.jp/5apfssh/>

編集後記

新しい年が始まり、会員の皆様には新たな決意・目標を胸に日々邁進されておられますことと存じます。世間の長引く不況や緊張高まる中東情勢など不安定な世情ですが、広報委員会は新しいホームページの立ち上げや、日本医学会総会での一般市民向け公開展示出展に向け、一同頑張っております。日手会ニュースの内容につきましても改善していかなければなりませんので、ご意見・ご要望をどしどしお申し出ください。学会ホームページを利用した新しい企画なども、ご提案いただけますれば幸いです。4月の学術集会を控えご多忙な毎日とは存じますが、時節柄ご自愛ください。（鈴木 康）

広報委員会

（担当理事：伊藤恵康 委員：田中寿一，青木光広，島田幸造，鈴木 康，田中英城，谷口泰徳）